昭和四十三年三月

# 宮崎県文化財調査報告書

第13輯

宮崎県教育委員会

昭和四十三年三月

# 宮崎県文化財調査報告書　第十三輯

宮崎県教育委員会

# 目次

一、宮崎市生目浮田横穴古墳調査報告……県文化財専門委員　石川恒太郎　一頁
二、国富町飯盛の地下式古墳調査報告……県文化財専門委員　石川恒太郎　一五頁

# 宮崎市生目浮田横穴調査報告

県文化財専門委員　石川恒太郎

## 一、遺跡の所在

宮崎市生目の大字浮田字照明院三二三二番地の密柑山にある横穴古墳で、土地の所有者は同地の大字柏原、谷口熊太氏である。現場は宮崎市役所生目支所のすぐ北方にある池の北側にある丘地の中腹で、第1図に示すごとく岡の南斜面にある。写真第1の人物の居るところがその場所である。所有者谷口氏の語るところによれば、数日前ここの密柑の間にルーピンを植えるため土を削ったところが、小さい穴があいたので覗いてみると中は大きい穴となっていた。それで穴を少し掘り拡げて入ってみると横穴古墳らしく高杯（須恵器）が二個入っていたので、それを取り出し支所に届け出たということであった。地面にあけられた穴は写真2に示す通りであった。それで穴の中を覗いて見ると、これは横穴古墳の玄室の天井部が壊れたもので、羨道は南側に見えており、玄室は、ほぼ四角形をなし、天井が剝落したらしく、相等に土や岩で埋まっていた

この丘地は、第三紀の砂岩と頁岩との互層から成る地層が上部にあって、その下に軟かい砂岩から成る厚い層があるので、この砂岩の層に横穴を掘っているわけである。なおこの横穴のある丘地の東斜面にも横穴があるということであり、別に県で指定している字照明院二二六四の一の横穴があるのでこの附近に三基の横穴が発見されているわけであるが、地形、地質ともに同市蓮ヶ池と似ているので、恐らくなお数基の横穴があるものと思われる。

第1図　生目浮田横穴附近概略図

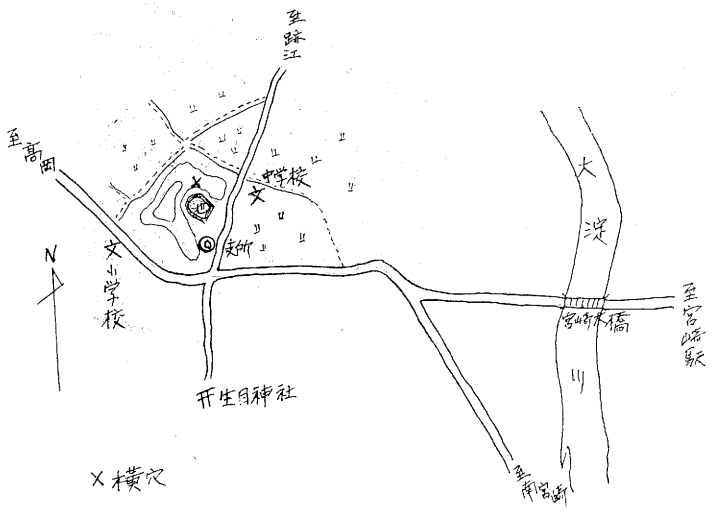


**写真1.** 横穴のある密柑山

**写真2.** 地面にあいた穴

## 二、発掘調査

昭和四二年一〇月三〇日、県教育庁社会教育課の寺原文化財係長、市社会教育課吉田主事とともに現地に行き、地主谷口氏の協力のもとに、先ず羨道部の外側から掘り初めたが写真1でも知られるごとく、この場所は丘地を段々畑にしているので、羨道のある場所は上の土をもって埋めた部分であるため外側から羨道の口（扁たい岩で塞いである）まで掘ることは容易でないことが知れた。それで、既に壊れているのであるから、天井部を一部破って土を出し、玄室から調べることとした。その結果は第2図に示す通りである。

まず横穴の構造から説明すれば、穴は羨道を南に玄室を北にして穿たれており、その中心線は南北より約一五度東に向いているが、だいたい南北に方位しているというべきであろう。

玄室は四角形であるが、東西より南北がやや長く、奥壁より入口の方がやや広い。奥壁は東西二m、東壁の長さは南北二・五〇m、西壁の長さは二・四五m、入口の広さは二・一三mである。壁は入口のほかは北、西、東の三方とも、上部は基底より、やや円味をもって内側に傾いている。つまり上部が狭まっているわけで、その傾きは奥壁（北側）で二〇cm内に傾き、東西の側壁は三五cm内に傾いている。

そして室の四隅と床面から約一m高さの各壁に箆描きの一線が引いてあるが、これは柱と梁の線を表現しているものと思われる。天井はすでに殆んど剝落し、現在の最高一・七〇mであるが、蓮ケ池の横穴などの例から見て、天井は方形（ほうぎょう）または四注（しちゅう）造りの屋根形になっていたものと思われる。梁や柱の線を描いているのはそのためである。玄室の床面は第2図の縦断図に見られるごとく南側すなわち羨道の入口に向って僅かながら勾配を示している。これは玄室床面のほぼ中央と四周に巾一〇cm、深さ二～三cmの排水溝を設けているのとともに、排水をよくするためであろう。玄室の床面には敷石は全体にはなかったが、東壁に沿うて巾約四〇cm内外、高さ一五cmの石が長さ約一・八〇mに並べられていたが、恐らく屍床であろうと思われる。

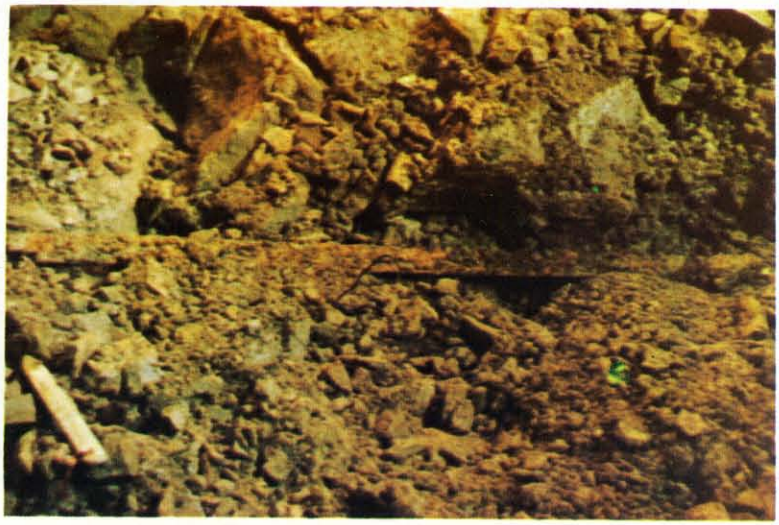
羨道は玄室の南に接し長さ一m、巾玄室の入口で八八cm、南端で六九cmあり、入口の方が狭くなっている。高さは九五cmで、全体で半楕円形をなしている。しかし口は垂直でなく、上部が斜に内側に入っており、口は閉塞石で密閉されており、閉塞石は縦に二枚に割れ、内側の一枚は内方に傾いていたし、外側の石は三つにヒビが入っていた。また羨道は玄室の中央についているのではなく、西壁から五五cm、東壁から七〇cmのところについていた。羨道の床面は玄室より五～六cm低く、かつ入口に少し傾斜していた。しかしこの外側の調査は不可能であった。

横穴内における遺物の配置状況はまた極めて興味あるものであった。それは第2図に示す通りで、土地所有者谷口氏が最初に入って採集した須恵器の高杯二個は、玄室の西壁に近い奥に南北に並んで置かれたもので、その位置は床面に底部の型が残っていた。この型は、一つは奥壁から四三cm、西壁から二七cmのところにあり、今一つは奥壁から七〇cm西壁から三〇cmのところにあった。これは蓋付高杯で、何れも蓋がなく、まっすぐに立ててあった。それで谷口氏の眼に入ったわけで

ある。しかるに発掘の結果、この蓋は羨道の東壁に近く、何れも「ツマミ」のある外側を下にして置いてあった。そして発掘後、この蓋と身を合せると符合することが解った。羨道内には他に遺物はなかったが、玄室には中央の排水溝の西側に砥石一個と鉸具（かこ）一個、および台付盤（まり）一個があったが、台付盤は数個に割れていた。

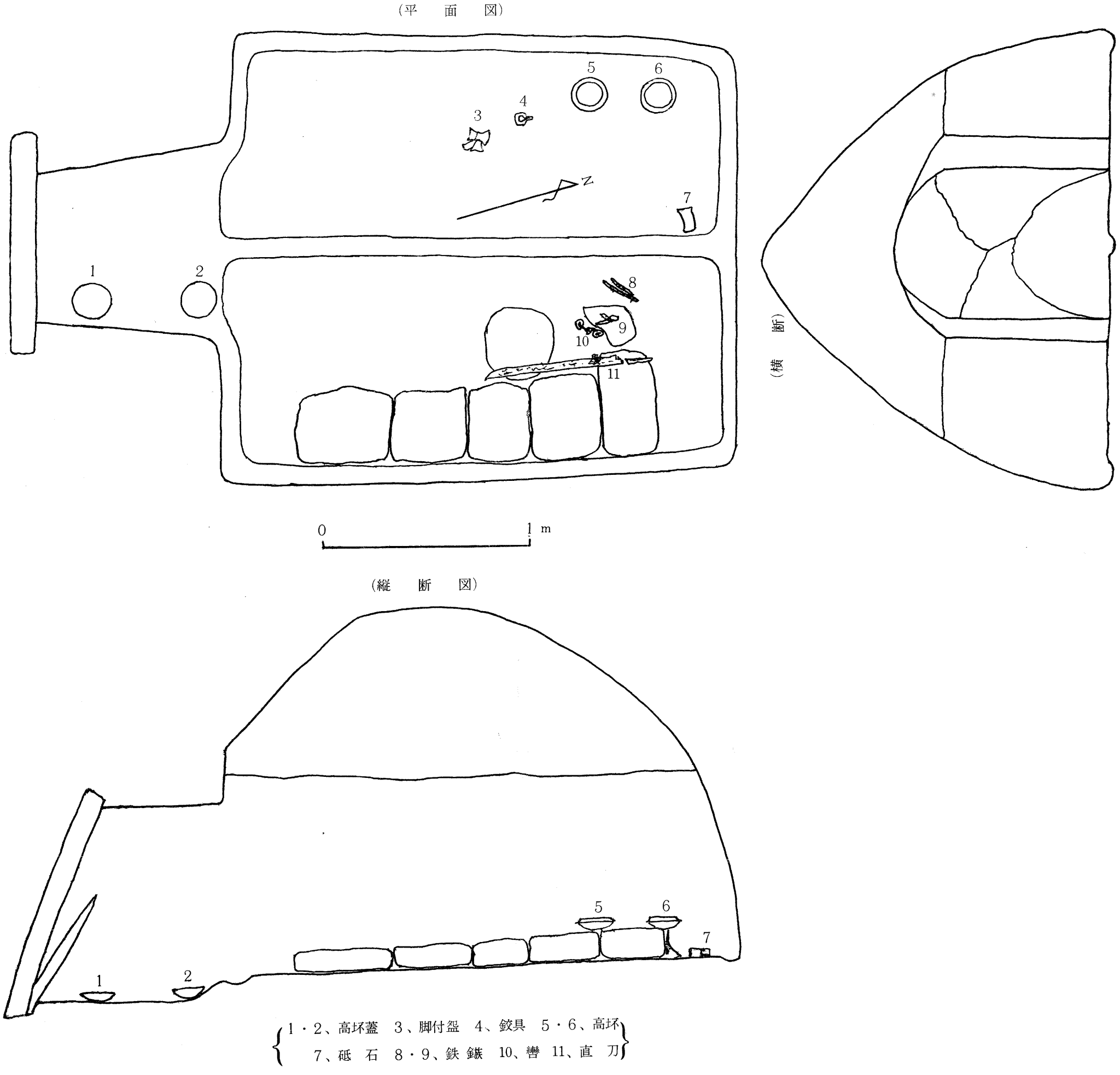
写真3. 刀の出土状況　（柄部が折れている）

写真4. 刀の置かれている状態



排水溝の東側には屍床の奥の石から屍床に平行してこれに接して直刀一振が、柄部を北に身を南にし、刃部を西に向けて置かれていた。この刀は写真3・4によって知られるごとく、石の上に安置されていたが、柄部が目釘穴から折れて斜めに傾いていた。恐らく天井の岩が落ちた際に折れたのであろう。刀は鋩の方がやや低くなっていたが、

第２図　宮崎市生目浮田横穴実測図




1・2、高坏蓋　3、脚付盌　4、鉸具　5・6、高坏
7、砥　石　8・9、鉄　鏃　10、轡　11、直　刀

柄部と先端とを石に戴せてあったことは明らかである。この刀の位置からもその東側の石の列が屍床であったことが推察されるのである。直刀の西側に鉄鏃二本と轡とがあった。鉄鏃は石の上に二本重なって戴っており、ために泥をかむって白色を呈し、二重に腐着している。轡は鉄製で、これも石の上にあったと思われるが、天井の崩落で下にずり落ちたらしく、石の間に斜に入っていたが、喰、引手、搦の輪などが割合にしっかりと残っている。さらにその西方に、これは床面に鉄鏃二本と破片などがあった。

このような遺物の配置から見て、ここに葬られていた人は、一人と見ることが妥当であろうと思われる。すなわち東側に南北に石が並べられている屍床の上に、頭を北にして人体が安置され、これを守るかのように、直刀一振が、柄を頭の方にし、刃を外に向けて置かれており、その向う（西側）に矢を交叉し、轡が置かれていた。

以上は石の上にあったものと思われるが、その西側のものは、直接床面に置かれていた。すなわち轡の西方に矢が数本置かれ、北壁に近く砥石が置いてあった。これは各面ともよく使われていることから見て、死者に愛用されたものと想像される。

西壁の奥に二個の蓋付高杯が、蓋なしで並べられているのは、死者の食用に供するための供物が盛られていたもので、その南方に台付盌があるのとともに、盌には飲み物が容れてあったものと察せられる。

そして高杯の蓋は羨道の東壁に接して、蓋を開いた姿で、摘みを下にして二個とも並んで置かれていたことは、身と蓋の配置が何らかの宗教的意味をもつもののように感ぜられる。さらに高杯と盌との中間に鉸具があったが、鉄製で凸字形をなし、先端の狭まったところに、これとかみ合う受金形の円形のボタン状鉄器が紐状の銹着物とともにくっ着いているのは、この物の用途を示す絶好の資料で、大きさから見て馬具の一部と解すべきであろうが、鉸具の発見は本県では珍らしいことであるとともに、環状鉸具が普通であるが、このような凸字形の鉸具は、鉸具として全国的に珍らしい一例で熊本県玉名郡の一例があるが多少異っている。

こうして発掘を終り、遺物を生目支所に預け、夕暮れに及んだので一応引揚げた。

## 三、遺　物

ついで十一月二日宮崎市社会教育課の曽根、吉田氏らと生目支所に行き、遺物の実測調査を行なったが、前に述べたごとく、この古墳より発掘された遺物は、直刀一振、轡一個、鉸具一個、鉄鏃五本分、蓋付高杯二個、台付盌一個、砥石一個であった。

以下これらの遺物について記そう。

### 一、鉄　製　品

鉄製品は直刀一振、轡一個、鉸具一個、鉄鏃五本分であった。

1　直刀　総長九二㎝、うち茎部の長さ一六・六㎝身長七五・四㎝であるが、茎部は関の下二・六㎝のところから斜めに折れている。身巾五㎝、もちろん平造りで、鋒はやや外曲線を描いている。厚さ〇・八㎝内外で茎の巾は三㎝である。この刀は全体的に頑丈な造りであることが感ぜられる。

2、轡　これも銹着しているが喰と「搦の輪」が二つずつに引手が一個くつついており、引手の一方は一部を残すだけで折損している。また鏡板は見当らなかった。

写真5　発掘の遺物

3、鉸具　一個で、凸字形をなし、長さ七cm、巾五・五cm、轡と同じように丸棒状の鉄で作られており、鉄の直径は〇・七cmである。前に述べたごとく、受金状の金具が銹着している。馬具の一部と思われるが、轡との位置が遠く離れていたのは、轡が割れた石の間に斜にずり落ちた形であったことと考え合せれば或いは天井の岩が剝落した際に飛んだのかも知れない。これは台付盌が割れて倒れていたこととも関連があるであろう。

4、鉄鏃　五本分である。(1)は長さ一一cmで鉾形であり、(2)は長さ一〇cmの平根の逆刺あるものに長さ六・三cmの鉾形のものが銹着している。(3)は長さ一七cmの柳葉式。これはヤリガンナではないかとも思うが、刃部が折損しているので明らかでない。一応鉄鏃と見ておく。(4)は折損しているが、鉾形である。

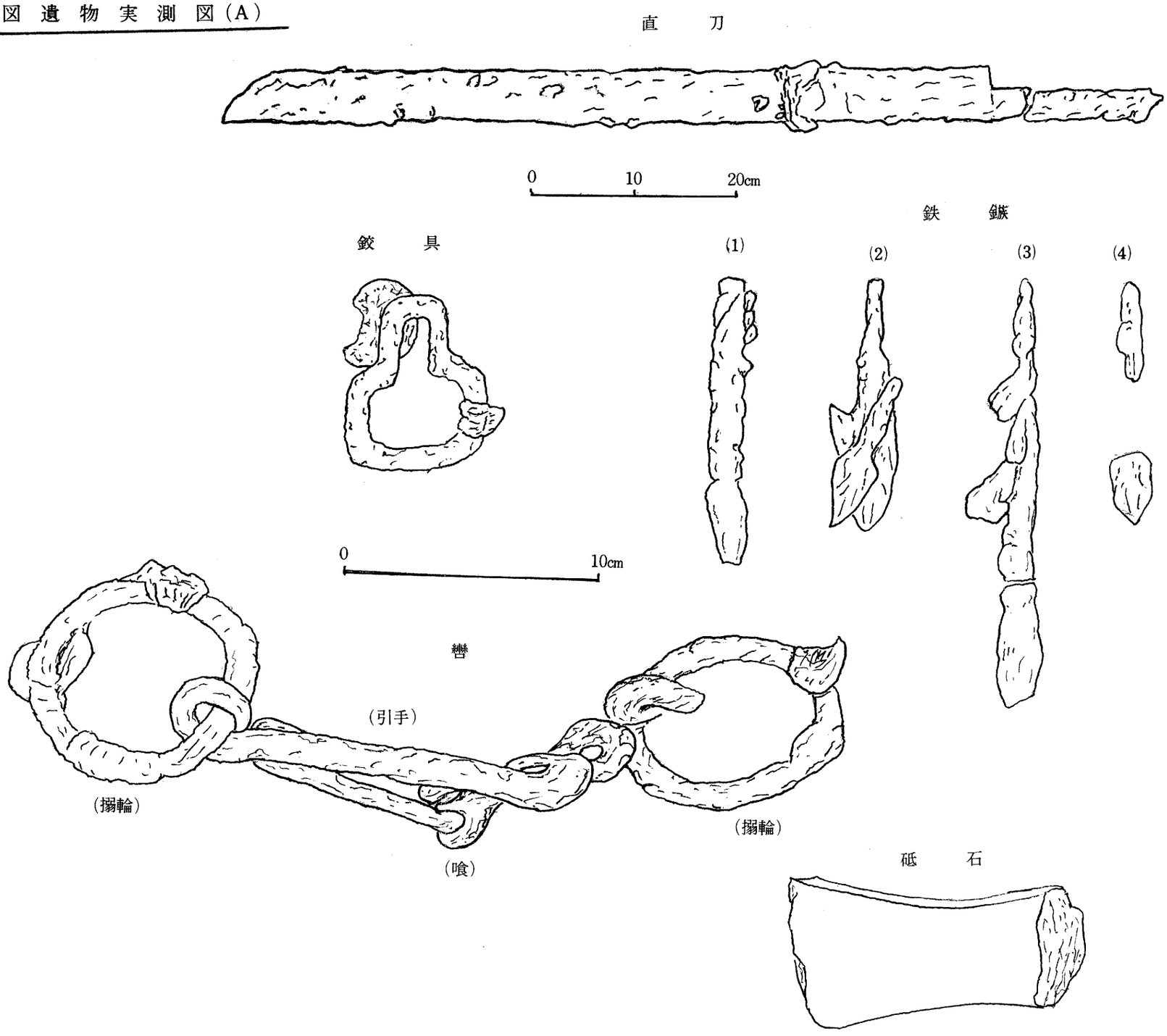
## 二、土器

土器はみな須恵器で、蓋付高杯二個と台付盌一個である。

1、蓋付高杯　これは蓋と身とより成っている。大きさは一方が何ミリか大きい程度でほとんど同じである。蓋は直径一五cm～一八cmで正円ではなく、ことに一方は蓋にゆがみがある。高さは大きい方は三・五cmの坏部に高さ〇・五cm、径三cmの摘みがついており、小さい方は高さ五・五cmに高さ〇・五cm、径三cmの摘みがついている。身もほとんど大きさは違わない。高さ一八cm、うち坏部の高さ七cm、脚部の高さ一一cmである。坏部は口径一四cm、その外側各二cm、高さ一cmが、蓋がかぶさるように張り出している。脚部は底径一五cm、坏部との接点の径四・五cmで、三方に二段から成る短冊形の透しがある。それで蓋をした高さは二二・五cmと二一cmとなる。

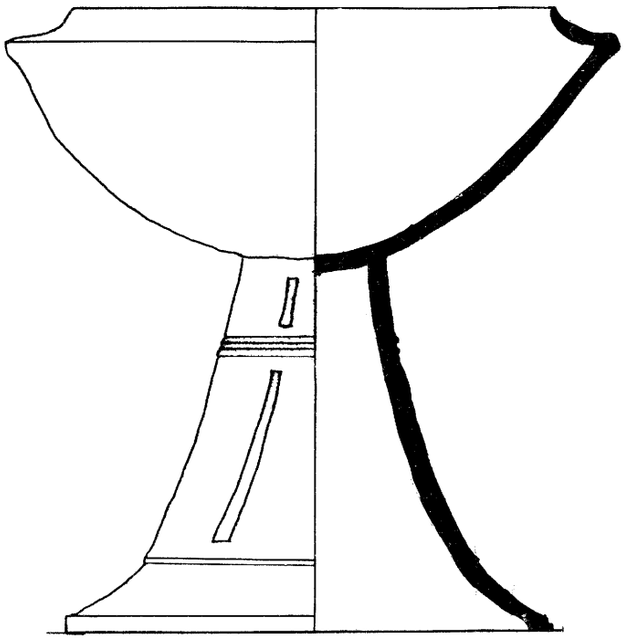
2、台付盌　これも盌の部分と脚とより成るが盌部は高さ七cm、口径一〇・五cmで、腹部が若干張っており、腹部の中央に巾二cmの薄い斜格子目文帯をめぐらしている。脚部は高さ六・一cm、底径一二・二cm、盌部との接点の径三cmである。なお高坏は灰白色であるが、この台付盌は黒灰色である。

第3図 遺 物 実 測 図（A）

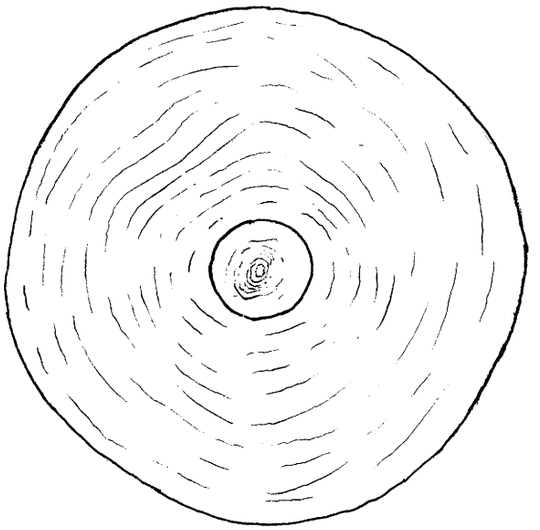


## 第4図 遺 物 実 測 図（B）

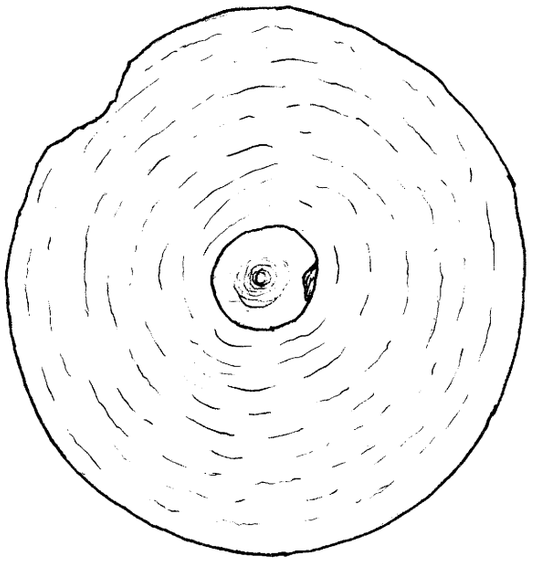
蓋 付 高 杯



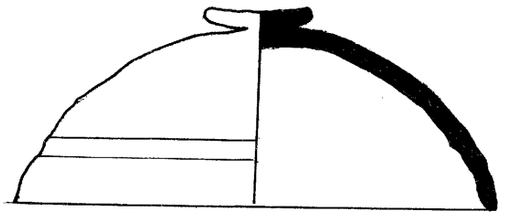
蓋 A 平 面



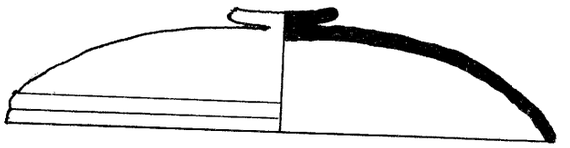
蓋 B 平 面



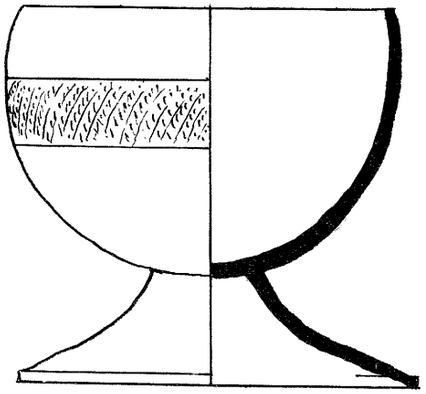
蓋 A 横 面



蓋 B 横 面



台付盌（復原図）



0 10cm

## 三、その他

砥石一個であるが、これは長さ一二cm、巾中央で四cm、高さ四cmぐらいの黄色の石で、今日でも使用されている石である。石灰岩の一種であろうと思われるが、前に述べたごとく各面ともよく使われて擦り減っている。

## 四、遺跡の年代

この遺跡は横穴古墳であるから、古墳時代の末期、奈良時代直前の六～七世紀のものと思われるが、横穴古墳としては古い形式であり、高坏によって見れば封土墳などより出るものより新しいので、六世紀の終りに近い頃のものであろう。

なお遺物の管理について土地の所有者が生目中学校のＰＴＡ会長である関係から同中学校に保管させてもらいたいという希望であったが、中小学校の遺物管理は一般的に見て良くないので、地元の希望があれば、一ケ月内外の一定期間を限って地元の人々や生徒に、中学校で展覧させることにし、やはり県立博物館で保管すべきである旨を市教委の人に伝え、何れにしても手続もあるので、保管については県教委の指示を受けることとし、遺物は市役所生目支所に預けて帰った。

# 国富町飯盛の地下式古墳調査報告

県文化財専門委員　石川恒太郎

## 一、発見の動機

東諸県郡国富町大字須志田字飯盛は本庄古墳群の一部をなす飯盛古墳群のあるところで前方後円墳二基と円墳六基の封土墳が指定されている。この地は須志田の東方で高さ六〇mの台地をなしているが、この台地上の畑に農業構造改善事業が行なわれており、昭和四二年一二月二六日ブルトーザーによって突然地下古墳の天井部が破壊されて一基が発見された。

同町教育委員会の報知を受け県教育庁社会教育課の寺原文化財係長とともに出張調査を行なったが、間もなく昭和四三年一月八日またその東北方に、同様にしてさらに一基が発見された。それで同町教育委員会の報知を受けて同日出張調査した。なお従来も発見されたことがあるらしく、ここには地下式古墳が群在すると思われるので将来も発見される可能性がある。それで発見の順によって前者を飯盛地下式第一号、後者を飯盛地下式第二号と命名し以下発見の場合はこれに準ずることとしたい。

## 二、飯盛地下式第一号墳

現地が甚だしく変貌しているので位置を定め難いが、封土墳四六号墳の一〇mぐらい南東に当るところに位置していたが、発見の報を得た同町教育委員会社教育係長宮川久氏が現場に急行して古墳であることを確認し、これを県教育庁社会教育課に報告するため引き返した留守に付近に住む町会議員の某氏が発掘したため、われわれが現地に行ったときは玄室は底までさらえられており縦半分残っていた頭蓋骨と鉄器片などは肥料を入れるビニールの袋に入れてあった。頭蓋骨の位置は発掘者の語るところでは玄室内の北東部で羨道の入口に近い場所であったという。その他の遺物の位置は全く不明であった。

それで仕方がないので玄室と羨道を測量したが、この古墳は第一図に見られるごとく、ほぼ東西に方位し、西に玄室を設け東に羨道があり、さらにその東に竪穴があるが、降雨のため竪穴を調査することはできなかった。

玄室は長さ一九〇cmで東が広い梯形をなしており、北壁は長さ一九〇cm、西壁は長さ八四cm、南壁は長さ一九cm四で東壁は北側四四cm、南側三〇cmでその間に幅五六cmの羨道がある。だから羨道は中央よりやや南寄りに付いているわけである。玄室は天井を破壊されていたが北壁は高さ八〇cmで五二cmまではほぼ垂直で一面に朱が塗られていた。そしてそれから上が傾斜していた。恐らく天井は屋根形をなしていたものと思われる。

羨道の長さは三二cm、高さ六〇cmで、その先きが竪穴で開いていた

が、羨道には長さ三〇cm内外、巾厚さ各一〇cm内外の堅い石を詰めて閉塞してあった。

遺物は縦半分の頭蓋骨と他に多くの骨片があった。発掘者が東部に頭があったというから頭を東にして展葬されていたものと思われる。副葬品は刀一振と鏃の破片一個であった。刀は四片に折れていたが、接合して一振となる。全長六〇cmで、このうち刀身は長さ四三cm、身巾中央で二・八cm、厚さ〇・七cmで柄部は巾二cm、厚さ〇・五cmである。また刀身部には鞘の一部が銹着している。鏃は長さ一五・五cm、刃部の巾六cmで外側が刃をなし、内側は木を挿入するように断面がV字状を呈している。この種の鉄鏃の出土は珍らしいもので、失なわれた破片が惜しまれる。（第二図参照）

## 三、飯盛地下式第二号墳

この地下式第二号墳は一月八日に発見されたもので、その位置は地下式第一号墳の東北方に当り、封土墳四七号の南側で写真1に人物の立っている右側である。前回に土地の人に掘られたことから、今回は報告を受けるとすぐ寒い日で現地は雪であったらしいが、急いで現場に行った。しかし、どうした間違いか、今日は延期されたという誤報があったらしく、土地の人が頭蓋骨を移動してビニールの袋を被せた後、近くをブルトーザーで押したため壁が壊れ、天井の土は玄室を埋め、しかも玄室全体が崩れかけていて多少危険を感ずる状態であった。そのために前に土地の人がビニールを被せておいたという頭蓋骨すら埋まって所在不明となっていた。

この古墳はほぼ南北に方位して営まれ、北方に竪穴と羨道を造りその南に玄室を造っていたが、竪穴と羨道とは見ることができなかった。玄室は南壁の長さ一〇五cm、東側の壁の長さ一二五cmで、高さは六〇cmであった。西壁と北壁は壊れていて明らかでなかった。玄室の東壁から四五cm西方、南壁から八〇cm北方のところに床面に下顎骨と歯のある所があったから頭蓋骨はここにあったことが知られた。するとその北方でビニールを下に敷いた頭蓋骨が現われたが、土地の人は土に埋らぬようにビニールを被せたというから、ブルの震動で転倒したものであろうか、その割に骨は痛んでいなかった。

副葬品はその南方の南壁から四〇cm北、東壁から三〇cm西の所に鉄鏃一本が刃を南に向け東壁に併行して置かれていたのみであった。この鉄鏃は鉾形の平根式で竹の一部を残し総長一八・七cm、このうち五・六cmは柄部矢竹で竹は径一cmで根は最広部の巾四・五cmである。（写真2）

## 四、古墳の年代その他

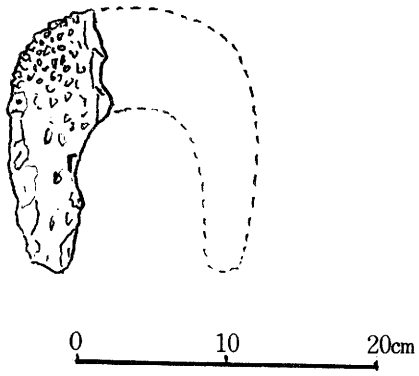
以上のごとく、両墳とも地元の人びとによって壊されたり掘られたりして、切角の発見が学術上に寄与する所が少なかったことは遺憾であるが、両墳とも頭蓋骨をほぼ完全に近い姿で採集することができたことは、当時の人を知り得る資料として貴重なもので、人類学の専門家の鑑定を求めるため県立博物館に保存することとした。

副葬品のうち鉄鏃は破片ながら貴重な遺物であるとともに、これらの古墳が古墳時代後期のものであることを示す資料である。刀、鉄鏃とともに、同じく県立博物館に保存することとした。

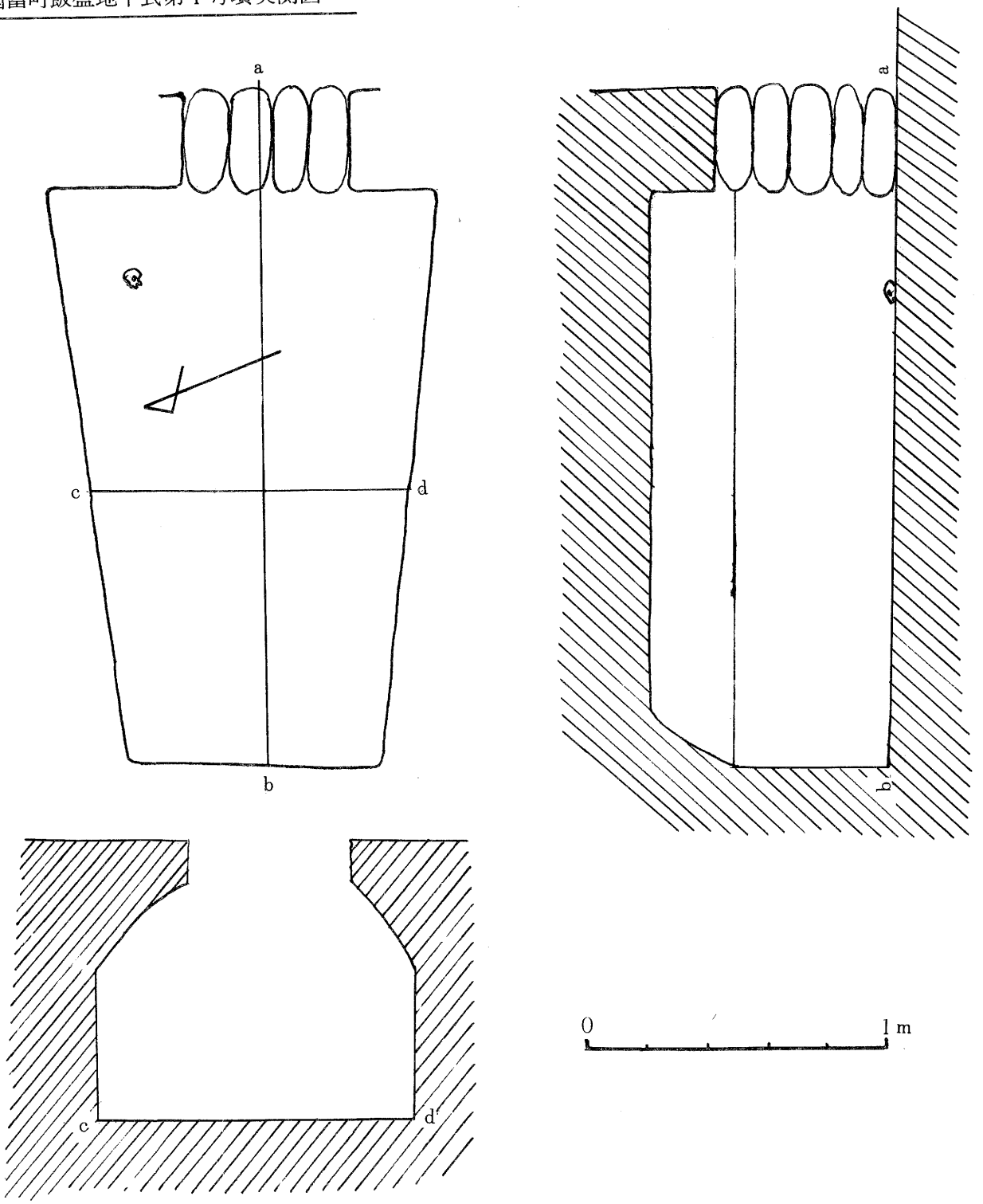
それにしても二基とも地元の心ない人によって充分な調査が出来な

い状態とされたことは誠に遺憾で、国富町は県下でも古墳の多い所であり、今後もあることであるから、同町教委を通して地方の人びとへ充分な啓蒙が必要であると感じた。

第２図　飯盛地下式第１号出土刀と鉄鏃



第１図　国富町飯盛地下式第１号墳実測図



**与 真 1.** 飯盛地下式第2号墳

(人物の右側に竹の立つている所、後方は47号古墳)

**写 真 2.** 鉄　　鏃

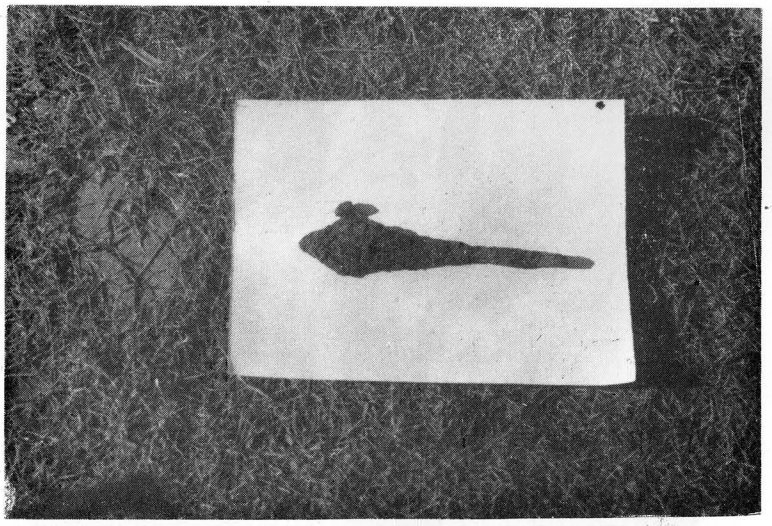


**写真3.** 頭　　蓋　　骨

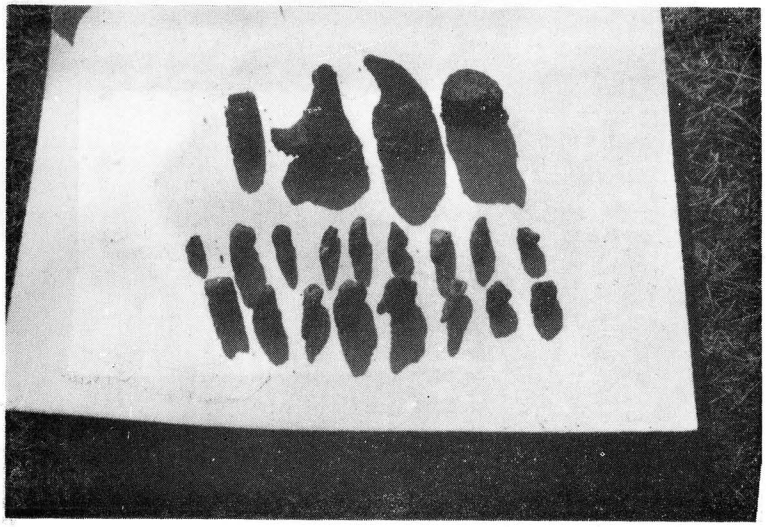



**写真4.** 歯 お よ び 骨 片